

フィッツジェラルド研究  
－失われた青春と彼の文学－

兼 定 和 憲

**A Study of Fitzgerald**  
**－Lost Youth and His Literature－**

Kazunori KENJO

Francis Scott Key Fitzgerald was born on September 24, 1896, at 481 Laurel Avenue in St. Paul, Minnesota. At seventeen he was admitted into Princeton University, and next year, he associated with John Peale Bishop, who was helpful as the teacher of poetry for him, and with Edmund Wilson, who was the chief editor of *The Nassau Literary Magazine*, and both of them exerted influence on his literature.

On Fitzgerald's literary works, we can feel keenly the contemporary sense of Jazz Age. The three big factors of his literature are consisted of youth, beauty and wealth. Its youth is, however, 'lost youth' in his novels depicting the disturbed situation of the *après-guerre* generation as well as Fitzgerald's youthful days.

We often hear the words 'The Spokesman of the Jazz Age' and 'The Standard Bearer of Lost Generation' and they remind us of F. Scott Fitzgerald. He is only too ready to be regarded as a post-war writer who had a personal experience of the life of new generation in America of post World War I where the new sense of value was not yet fixed, and who lived in his own dream and sacrificed his life to his own one, revelling away in his youthful days.

Fitzgerald's literature can be expressed as what is called the word's 'youthful literature'. The 1920's was the time when a new generation took the place of the last in the situation of American society, and it was the time when American young men and women enjoyed themselves in drinking, singing, and dancing. At the same time, however, in the back side of economical prosperity, that is to say, in 'this side of paradise', mental devastation and moral depreciation filtered deeply into the whole society. Namely, it is the Jazz Age, and the characteristic of Fitzgerald's literature containing hope and disappointment, success and failure, dream and collapse appealed keenly to young men and women of this period.

Youth as one of the main themes in Fitzgerald's literature is nothing but a transient dream, a vacant illusion between the economical prosperity and the mental sterility of the back side. Fitzgerald projected and overlapped his youth well on his literary works in the presence of us. It was, however, 'lost youth' variegated with the sad illusion and the magnificent, but transient dream. That is to say, Fitzgerald describes the sad lives of young heroes in his novels, but it seems to be nothing but what he accorded with his life. Here are the essence of Fitzgerald's literature and also the reason why his literature appeals to our hearts.

フィッツジェラルドの文学作品には、Jazz Ageの同時代意識が強く感じられる。その彼の文学における三大要素は、青春・美・富から成り立っている。しかし、その青春は、フィッツジェラルドが精神面で、*après-guerre generation*の混乱した状況を描いた小説の中では、'lost youth'である。彼は、自分のロマンチックな若いヒーローを使って、小説の中で、軽妙なアイロニーと共に、ロマンチックなアイロニーを駆使して、1920年代のアメリカの物質主義の現実社会を描写した。無慈悲な金持ち階級は、若い理想主義者のロマンチックなイマジネーションを破壊したのである。Richard D. Lehanは次のように言う: "Fitzgerald's persistent theme of lost youth is really the theme of lost opportunity--a failure of permanent achievement--and the object of achievement is the splendid life which only the very rich can afford."<sup>1</sup>しかし、フィッツジェラルドの文学において、金持ち階級は第1次世界大戦後の世代を謳歌した'moral let-down'の象徴である。言い換えると、既存の金持ち階級は、彼の小説の若いヒーロー達のロマンチックな幻と夢を裏切る。彼等は、お金の影響力に依って彼の小説の悲しい若きヒーロー達を破壊するのである。しかし、フィッツジェラルド自身は、はじめの頃は、金持ち階級の豪華な生活に魅惑されたのである。

フィッツジェラルドの青春崇拝は、彼が Keats, Swinburne, Wilde, そして Rupert Brookeを読んだプリンストン時代に創まったのである。勿論のこと、*This Side of Paradise* のタイトルは、Rupert Brookeの詩'...Well *this side of Paradise!* There's little comfort in the wise.'から取られている。同時に、そのカバーのバック・ページにOscar Wildeの詩'Experience is the name so many people give to their mistakes'を載せている。このように、フィッツジェラルドは若い時代に、これらのロマン派詩人達の詩を受読したのであった。

第1次世界大戦後の世代は、戦前の世代の伝統的道的価値を否定したのであった。ジャズ・エイジのこのような社会状況のもとで、フィッツジェラルドは、信じる価値がある新しい価値判断を探し求めた。そして彼は、自分の小説の中で、行動の基準を求めるために、不安が充分伴ったアメリカン・ドリームの開求を描写したのである。フィッツジェラルドの若きヒーロー達のほとんどは、青春時代に自分達の人生に対するロマンチックなビジョンをしっかりと持っている。

フィッツジェラルドのロマンチックなヒーロー達は、waste land (1920年代のアメリカを示唆する)の道徳心が失われた社会の中で、夢、希望、美、快楽、富の無限の世界として自分達の青春をみなしている。彼の小説の若きヒーロー達は、その腐敗しそして歪んだ社会の

中では偉大なスーパーマンである。フィッツジェラルドは、金持ち階級の悪を痛烈に感じそして無慈悲な人々の'moral let-down'を批判しながら描写した。この点に関して、彼は誤魔化の物質主義者と闘う若い罪の無い理想主義者を巧妙に描写し、心無い金持ちの人々の手にかかって青春を失う様子を、自分の気持ちとして伝えたのである。「特に*The Great Gatsby*の中で、フィッツジェラルドは、自己の人生における個人的テーマを歴史的視点でアメリカのテーマと対比した。彼は、*Gatsby*の途方もないストーリーがアメリカ自体のストーリーに関連付けられるまで、象徴、隠喩、風刺、引喩を通して、小説の中でその対比を見事に展開させたのである。つまり、ロマンチックな理想主義と無慈悲な物質主義の凄じい闘い、第1次大戦前の世代とその後の世代の対比、そしてアメリカの東部社会と西部社会の対比である。」<sup>2</sup> 勿論、フィッツジェラルドの若きヒーロー達の中で、特に*Gatsby*は、アメリカ社会の物質文明を現わしているジャズ・エイジの中で、'lost youth'をはっきりと象徴している。

金持ち階級は、フィッツジェラルドのヒーロー達を死に至るまで魅了し、金持ち階級の美と富に恍惚とさせられた悲しい若きヒーロー達を破壊したのである。この点に関して、Milton Hindusは、次のようにうまく言っている:

One of the prime feelings in all of Fitzgerald's work is that inspired by the contrast between wealth and poverty which America presents. He is not only attracted by the leisurely and aesthetic life which is possible for the rich but he is repelled by the ugly conditions of life to which the poor are condemned.<sup>3</sup>

このように、フィッツジェラルドの分身、すなわち、彼の小説の若きヒーローは、彼の儚い夢を通して、お金と美しい少女を手に入れようと切望するのである。しかしながら、得られぬ、このヒーローの恋人は、アメリカ社会の金持ち階級に属しているのである。言い換えれば、彼の恋人は、Keatsの有名な詩の一つのタイトルのように、'la belle dame sans merci'であり、苦痛・悲哀などを引き起こす心、すなわち、死に至るまで彼の心を毒する心の悪を持っている。そして又、この点に関して、Lehanは次のように言っている。

If Fitzgerald's attitude toward the past was ambivalent, so was his attitude toward money. He is said to have worshipped money as a means, not an end-as a means to greater mobility, as a means to the heightened world that his imagination had created. And yet Fitzgerald distrusted the very rich and was suspicious of them. The reason for this stems from an experience that has not as yet been fully investigated. In January of 1917, Ginevra King, from a very wealthy Chicago family, broke with Fitzgerald, and on September 24, 1918 she married William Mitchell. Ginevra's father never approved of his daughter's interest in Scott. Charles King was a wealthy broker. He was born in 1873 into a prominent Chicago family of mortgage bankers. In 1894, when he left Yale, he joined the family firm of Shanklin and King, and in 1906 he organized his

own firm--King Farnum and Co. He kept two homes--in the winter living at 1450 Astor Street in Chicago, and in the summer on Ridge Road in Lake Forest. To Mr. King, Fitzgerald was from another world, and Fitzgerald soon became aware that he was considered socially beneath Ginevra.<sup>4</sup>

要するに、フィッツジェラルドは、金持ち階級のいまわしい無慈悲と無責任をひどく嫌ったのである。それ故に、彼は自己の作品を通じて、その悲しい若きヒーロー達に対して同情を感じたのである。この点について、Andrew Turnbullは、次のようにフィッツジェラルドに関する伝記の中で、大変うまく述べている：

Fitzgerald sensed a corruption in the rich and mistrusted their might. 'That was always my experience,' he wrote near the end of his life, '--a poor boy in a rich town; a poor boy in a rich boy's school; a poor boy in a rich man's club at Princeton.... I have never been able to forgive the rich for being rich, and it has colored my entire life and works.' He told a friend that 'the whole idea of Gatsby is the unfairness of a poor young man not being able to marry a girl with money. This theme comes up again and again because I lived it.'<sup>5</sup>

この思想は、フィッツジェラルドの文学の底に流れており、彼のすぐれた小説の中での愛の言葉は、貧しいヒーロー達が、彼等の金持ちの恋人達を愛しそして自分達の手に入れようとする過程の中で生まれてくるのである。このような考え方は、アメリカのジャズ・エイジの風潮に完全にマッチしたものである。

最初に、*This Side of Paradise* について考えてみたい。この小説は、2部、すなわち、'The Romantic Egotist'と'The Education of a Personage'から成り立っている。第1部の'The Romantic Egotist'では、Amory Blaineの子供時代・彼の学生時代・第1次世界大戦の為の入隊が扱われている。一方、第2部では、第1次大戦後の社会でのAmoryの若い頃の経験が描かれている。第1部で、素晴らしい容姿・卓越した知性・途法もない富を付与されたAmoryは、彼の人生の長い旅路に出るのである。そして、彼は、現実の世界の一連の精神的な面における厳しい試練に耐えるのである。最後に、Amoryは、小説の終りで悲しい自己認識に至るのである。彼の生き方は、アメリカの若い世代の生き方を反映している。実際に、現実の社会に対する彼の勇敢な反抗は、アメリカのジャズ・エイジの若い男女達から同情と共感を呼び起こしたのである。彼の厭世観と精神面での失われた青春に対する嘆きにおいて、Amoryはジャズ・エイジの原型的なヒーローである。

Amoryは、世の中で一番若い将軍になる夢をほしいままにする。それから、彼は、トップ・カールと互いに愛しあうようになるのである。そして一種の貴族的エゴティズムに従って生きることが自分の生き方とみなしている。彼が13才の時、Amoryの母はミネアポリスの彼女の親類へ彼をやり、そして粗雑で俗悪な西部文明が彼をとらえるのである。彼のプリンストン時代の生活の中で、Amoryは、多くの学生と友達になる。そこでWilde, Swinburne, Keats等を読む機会を持

つのである。ある時期、彼はペッティング・パーティーに出席し、それから彼の反抗の意志表示は、お上品ぶった道徳と上品な伝統を拒否するのである。Amoryの唯美主義は、彼の親友である Monsignor Darcyによって奨励され、Amoryは、人生におけるすべての考え方と道徳的判断を彼に任せ、彼の助言は、あらゆる面でAmoryの若い傷つきやすい心の助けになるのである。Amoryが想像の夢の世界に住んでいる間、アメリカの現実社会は、次第に変化してゆくのである。青春の終りに、Amoryは、大戦に直面させられて、彼は、入隊するためにプリンストンを去ることになる。最後に、第1部を結ぶ一通の手紙から、私達は、Amoryが自分自身の義務を果たすことに成功したことを知るのである。

‘The Education of a Personage’ は、AmoryとRosalindと言う名前のアプレゲール・ガールのドラマチックなシーンではじまる。彼女は、Amoryにとってこの世にある総てのものである。彼は、彼女が自分の貧しさのために自分を拒否する時、失望したのである。その後、Amoryは、ロマンチックなEleanorと遭遇するが、彼等の情事は、Eleanorの母の死のために終るのである。Amoryの失望は、不治のものとなり、彼は、現実の社会の中で人生の‘無’を痛切に感じるのである。Amoryは、友人を防御するために、私立探偵と衝動的に対立する。そして新聞を読みながら、彼の目は、Rosalindの婚約の声明に向けられるのである。彼は、彼女を失い、屈辱の頂点で、その事は、彼の心に大打撃となるのである。その結果、彼の心の支柱は、彼が母の財産から送金がいもう期待出来ないと知り、又 Monsignor Darcyの思いがけない死のニュースを聞いた時、一つづつ崩壊するのである。彼が自分の青春の支えを失った時、Amoryは、単に一人の人間となるのである。

*This Side of Paradise* は、若い読者達の心の中で、お上品ぶった偽善に対する抗議と反抗の小説となった。フィッツジェラルドは、*This Side of Paradise*を書いていた当時、貧しい若者が、金持ちでないかそれとも十分なお金を持っていないため、美しいトップ・ガールを得ることが出来ない、と考えていたのである。事実、フィッツジェラルドは、この小説の中で、“His(Amory’s) instinct perceived the fetidness of poverty, but no longer ferreted out the deeper evils in pride and sensuality.”<sup>6</sup>と、述べている。フィッツジェラルドは、本能的に‘貧しさのみじめさ’をひどく嫌った。しかし同時に、‘金持ちの人々の心の邪悪’を鋭く感じとっていたのである。彼は、富豪たちの人生における行動や考え方を注意深く観察し、彼等の物質主義の不道徳と不誠実を批判したのである。

歴史的に言えば、1920年代は、第1次世界大戦後、空前の好景気に沸いたアメリカで、デキシーランド・ジャズ、カクテル・ダンス・パーティーや断髪などの新しい社会風俗と果てしない未来への夢が、若い世代をとらえた時代である。この頃の若者達は、アメリカ社会において思想の乱れを痛切に感じていた。又、アメリカ人の生活の変化が非常に急速な時期であった。故に、別名、1920年代は、“ローリング・トゥエンティ”と呼ばれている。*This Side of Paradise*の中で、フィッツジェラルドは、この時代（ジャズ・エイジ）の目立った特徴をはっきりと述べている。

‘Modern life,’ began Amory again, ‘changes no longer century by century, but

year by year, ten times faster than it ever has before'--populations doubling, civilizations unified more closely with other civilizations, economic interdependence, racial questions, and--we're dawdling along.<sup>7</sup>

それから、

...the chosen youth from the muddled, unchastened world, still fed romantically on the mistakes and half-forgotten dreams of dead statesmen and poets. Here was a new generation, shouting the old cries, learning the old creeds, through a revery of long days and nights; destined finally to go out into that dirty grey turmoil to follow love and pride; *a new generation dedicated more than the last to the fear of poverty and the worship of success; grown up to find all Gods dead, all wars fought, all faiths in man shaken....*<sup>8</sup> (Italics mine)

このように、ある意味では、Crossが言うように、*This Side of Paradise* が、“one of the most important social documents of the Jazz Age.”<sup>9</sup> であることは、明白である。しかしながら、他方で、もっとより深い意味と重要な問題が秘められていると思われる。

Amoryにとって、聖杯を探し求めることは、事実、‘失われた青春’の慰みから起るのである。この点に関して、フィッツジェラルドは、次のようにジャズ・エイジの現実を正確に、又、明確に観察している。

*There was no God in his (Amory's) heart, he knew; his ideas were still in riot; there was ever the pain of memory; the regret for his lost youth--yet the waters of disillusion had left a deposit on his soul, responsibility and a love of life, the faint stirring of old ambitions and unrealized dreams....*<sup>10</sup> (Italics mine)

このように、若き主人公Amoryは‘waste land’の世界に生き続けなければならないし、彼が信じる事が出来る神は居無いのである。それ故に、ある意味で、*This Side of Paradise* は、フィッツジェラルドの宗教を信じる心を喪失した年代記ものであると言えるのである。即ち、精神的局面において、若者の青春は、古い世代と新しい世代の間の大きなギャップの中で失われるのである。*This Side of Paradise* の次のような壮大な悲哀と幻滅に満ちた結末は、多くの若い読者の心を感動させたに違いない。

*'It's all a poor substitute at best,' he (Amory) said sadly. And he could not tell why the struggle was worth while, why he had determined to use to the utmost himself and his heritage from the personalities he had passed.... He stretched out his arms to the crystalline, radiant sky.*

*'I know myself,' he cried, 'but that is all.'*<sup>11</sup> (Italics mine)

この小説のロマンチックな結末は、フィッツジェラルド文学における本質の1つである。言い換えれば、*This Side of Paradise* は、新しい世代、すなわち、成人して「全ての神々が死んで、全ての戦争が行なわれて、人間の全ての信仰が揺らいだ」ことを認識した世代にとって、重要な小

説だと言えることが出来る。この点において、事実*This Side of Paradise* は、'Lost Generation' を告げていると言えるのである。小説の終りで、ヒーロー Amory は、自分自身に対して 'lost youth' を持続しながら、又、かなうはず無き事を希望しながら、悲哀と幻滅に満ちた自分の人生の旅路を歩かねばならないのである。その長い人生の旅路で、M. Hindusが言うように、人生は"a meaningless trajectory between nothingness and nothingness."<sup>12</sup> であるとAmoryには思えた。言い換えれば、この不安な世代にあって、人生は、誤魔化であったし又、青春は、魅せられた時期であった。従って、人生における物事の判断や生活信条に対する伝統的基準や範疇は、新しい世代によって否定されたと言えよう。

次に、3部から成る *The Beautiful and Damned* について考えてみたい。Amory Blaineのようにあらゆる面で豊かな天分を付与されている、ヒーローAnthony Patchは、無意味な人生を当てもなく生きているのである。彼の途方もない生き方に対する弁明は、'life is meaningless'という彼の人生哲学に依っているし、更に彼は、十分な富の所有が途方もない生き方を可能にすると知っている。Anthonyは、彼の祖父であるAdam Patchを嫌っている。祖父は、百姓から身を起こして、軍隊を退役し、ウォール街で莫大な財産を築き上げた独立独行型の人間である。そして、若者が反抗するヴィクトリアン・モラルティと社会一般の因習を代表する保守主義者であり、偽善的なピューリタニズムの信奉者である。

フィッツジェラルドの小説の他のヒロイン達のようにフラッパーである、彼の美しい妻Gloria Gilbertは、怠惰な生活、すなわち、人生は、無意味であるという点に執着するのである。従って、彼女の唯一の関心事は、自分自身の青春と永遠の美に関するものである。幸せへの狂おしい追求の中で、AnthonyとGloriaは、彼等の富と青春を途方もなく浪費し、目的もなく生きて、無謀に自らを費やすのである。このような理由で、彼等は、次から次と、無意味な乱痴気パーティを行うのである。祖父Patchが、乱痴気パーティが行われている最中、彼等のアパートを突然訪れた時、彼の怒りはクライマックスに達する。彼等の酒に酔った態度に激怒して、彼は、Anthonyから経済的援助をカットするのである。このため、Anthonyは、人間の精神力を取り戻そうとするが、しかし、完全な精神的破滅を被るのである。最後に、彼等は、小説の終りで自己認識の段階に到達するのである。

このように *The Beautiful and Damned* の中で、フィッツジェラルドは、アメリカのジャズ・エイジの'waste land'におけるAnthonyの苦悶を生き生きと描き出したのである。Anthonyは、向う見ずな世代に生きながら、その向う見ずを承認することに我慢出来ず、何もせずに又そこから逃げることによって、生活の平和を得たいと願望するのである。第一次世界大戦の時代と戦後の時代との両方の社会に生きてきたAnthonyとGloriaは、確かな見込み（望み）に愛着するために、彼等の心の中に新しい幻影を築き上げたのである。Anthonyが拭い去ろうとしたのは、ジャズ・エイジの底に流れている'向う見ず'と'孤独'の感知し得ぬ影であった。この点に関して、'人生が無意味である'という見方が、三人の男性の間における会話の中に認められる：

Maury: I know--with intellectual lyrics that no one will listen to. And all the

critics will groan and grunt about 'Dear old Pinafore'. And *I shall go on shining as a brilliantly meaningless figure in a meaningless world.*

Dick (pompously) : *Art isn't meaningless.*

Maury: It is in itself. It isn't in that it tries to make life less so.

Anthony: In other words, Dick, you're playing before a grandstand peopled with ghosts.

Maury: Give a good show anyhow.

Anthony (to Maury) : On the contrary, *I'd feel that it being a meaningless world.*  
*why write? The very attempt to give it purpose is purposeless.*<sup>13</sup> (Italics mine)

それ故、このような無意味な現代社会のもとで、Anthonyは乱痴気パーティーに愛着したかったのだ。他方、Gloriaは、自分の永遠の若さと美貌に愛着したかったのである。無意味なものは、Anthonyが最も確かなものとして信じた幻想であった。悲哀と幻滅は、幻想を信じる人々のために約束されているものである。彼等は幻想を信じて以来ずっと、背中に'damned destiny'を負うことになるのである。言い換えれば、彼等は、虚偽なるものに自分達の青春を捧げたから、いまましいのである。Gloriaは、自分の美貌の喪失に自分自身を甘んじることが出来ず、一方Anthonyは、これらの資質は不変であるというむなしい幻想に強く執着するのである。

AnthonyとGloriaは、人生とは無意味であると、彼等の青春の真ん中で痛感したのである。この点に関して、Edmund Wilsonが言うように、フィッツジェラルドが、*This Side of Paradise* の中で、「人生の中に意味」を見い出そうとした、一方、*The Beautiful and Damned* の中で、彼は「人生の無意味さ」<sup>14</sup>を感じたのは、明らかである。このことは、次のような会話の中にはっきりと現われている。

*There's only one lesson to be learned from life anyway,* interrupted Gloria,  
not in contradiction but in a sort of melancholy agreement.

'What's that?' demanded Maury sharply.

*'That there's no lesson to be learned from life.'*

After a short silence Maury said:

'Young Gloria, the beautiful and merciless lady, *first looked at the world with the fundamental sophistication* I have struggled to attain, that Anthony will never attain, that Dick will never fully understand.'<sup>15</sup> (Italics mine)

AnthonyとGloriaの青春は、人生が無意味であると信じて以来ずっと失われて来たのである。実際は、Robert Sklarが言うように、*The Beautiful and Damned* は、「Jazz Age」と同様 'Stone Age'のことも述べられているのかも知れない<sup>16</sup>精神面において、AnthonyとGloriaは、アメリカの'Stone Age'に生きていたと言える。この小説の結末で、フィッツジェラルドは次のように記述している。

Only a few months before people had been urging him (Anthony) to give in, to



submit mediocrity, to go to work. But he had known that he was justified in his way of life--and he had struck it out staunchly. Why, the very friends who had been most unkind had come to respect him, to know he had been right all along. Had not the Lacys and the Merediths and the Cartwright-Smiths called on Gloria and him at the Ritz-Carlton just a week before they sailed?

Great tears stood in his eyes, and his voice was tremulous as he whispered to himself.

*'I showed them,' he was saying. 'It was a hard fight, but didn't give up and I came through!'*<sup>17</sup> (Italics mine)

小説の終りで、この悲しい若きAnthonyは、厳しい人生の戦いの勝利への道程として自分の失われた青春をみなしている。主人公Anthonyにとって、失われた青春を生きることは、‘人生の無意味さ’を超越するための非常に厳しい試練であった。

このように、フィッツジェラルドは、比喩的に言えば、*This Side of Paradise*と*The Beautiful and Damned*を通して、想像豊かな若き芸術家のように、アメリカの1920年代の失われた青春の肖像を生き生きと描いたのである。しかしながら、フィッツジェラルドの主人公達は、AmoryとAnthonyも共に、幻想の世界に生きている。この2つの小説の終りで、彼等は自分達の幻想からはっきりと目覚めて、アメリカのジャズ・エイジにおける腐敗した現実の苦渋を味わうのである。他方、彼の短篇小説、すなわち“The Diamond as Big as the Ritz”, “Absolution”,そしてこれらの2つの小説の後に書かれた“Winter Dreams”の中で、フィッツジェラルドは、幻想からアメリカン・ドリームに基づいて作られた夢へ、彼の関心を移すのである。

彼の文学は‘青春の文学’という言葉で表現することが出来る。彼の文学は自己の青春時代の経験を基に、明るく豪華なアメリカ社会の雰囲気とそれと反対の暗い絶望的な主人公達の社会に対する自己認識が巧妙に重なり合って特異な光彩を放っている。フィッツジェラルドの文学の中に流れている‘アメリカン・ドリーム’とその世界と対峙している‘失われた青春’の世界が互いに交錯して、明・暗の二つの色合いを醸し出している。小説の背景は明るい要素で満ちているが、そこに生きる青年男女の精神状態は暗い要素で支配されている。

AmoryもAnthonyも彼等の‘不安な無意味な’社会の中を生き抜きその果てに、Amoryは「僕は自分というものを知っている」しかし、「だがそれだけのことだ」と語り、又Anthonyは「つらい戦いだったが、僕は諦めずに戦い抜いたのだ！」と吐露するのである。二人の主人公達の小説の最後のシーンで切々と語る言葉は、二人の青年の同様な人間の精神的状況から生れており、彼等が一種「悟り」の境地に立っている静観的人間であることを示している。つまり、両者とも‘失われた青春’の果てに辿り着いていることを自己認識出来たのである。

フィッツジェラルドは、1920年代のアメリカ社会の世相を、経済的面で、驚異的な繁栄に活気づいており、若い世代の人々にとっては、これまでのヴィクトリアン・モラルティに反抗して、新しい価値判断を求め、保守的な考えに固執している大人達を狼狽させた風俗的革命の時代であ

ると捉えている。しかし、精神的には、若者たちにとって、従来の伝統や習慣等が根本から揺いで、まさに失われた青春を送った不毛の時代と做している。言い換えると、フィッツジェラルドは、自分達の世代が、希望に満ち溢れた世界であると思って生きていたが、結局は、'moral let-down'の風潮が著しい幻滅の世界であったことを、私たちに示している。従って、幻滅の世界から再生を図ろうとして、夢すなわち、アメリカン・ドリームに'失われた青春'を託すのである。

フィッツジェラルドが自己の文学において描き上げた1920年代は、第1次世界大戦後のアメリカ社会が、経済的好景気に酔っていた時代である。しかし、それと同時に、その物質的繁栄の裏側、つまり「楽園のこちら側」には、精神的荒廃と道徳的低落が社会全体に深く浸透していた。すなわち、ジャズ・エイジと呼ばれる時代で、希望と失望、成功と失敗、夢と挫折というフィッツジェラルド文学の特質が、丁度この時代の若者達に強い共感と呼んだのである。このような時代背景を舞台に、作家フィッツジェラルドは、精力的に文学活動を繰り広げたのである。しかし、彼の文学におけるメイン・テーマの一つである青春は、ジャズ・エイジの物質的繁栄とその裏側の精神的な不毛の狭間において、儂い夢であり、むなしい幻影に他ならなかった。

フィッツジェラルドは、自己の青春を彼の文学作品を通して、私たちの前で見事に自己投影して、オーバーラップさせて見せてくれた。が、しかし、それは、悲しい幻影と壮大ではあるが儂い夢に彩られた'失われた青春'そのものであった。すなわち、フィッツジェラルドは、自己の小説の中で、若きヒーローたちの悲哀に満ちた人生を描出しているが、それは、取りも直さず、自分の人生を照応させたものと思われる。

小説の中で「書いた」ことを自己の人生において「実行する」ことほど、創造的個性を確固たるものとし、それを自己の文学の特性として見事に表現するものはないのである。この点に関して、フィッツジェラルドは、自己の人生と文学をその接点において、統合した作家と言えるのである。すなわち、私たちは、フィッツジェラルドの作品を読む時、目前に、自己の青春を燃焼し尽してアメリカ社会に生きた赤裸々な彼の人生の生き様を、鮮明に想い浮かべることが出来るのである。ここに、フィッツジェラルド文学の魅力と真髓があり、また、私たち読者の感動を呼び起こす所以がある。

#### NOTES

- 1) Richard D. Lehan, *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Works*, (Forum House, 1969), p. 171
- 2) Richard D. Lehan, *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Works*, pp. 49-50
- 3) Milton Hindus, *F. Scott Fitzgerald: An Introduction and Interpretation* (New York, Brandeis University, 1967), p. 23.
- 4) Richard D. Lehan, *F. Scott Fitzgerald: The Man and His Works*, p54.
- 5) Andrew Turnbull, *Scott Fitzgerald: A Biography*, New York; Charles Scribner's Sons, 1962, p. 141.
- 6) *This Side of Paradise*, (A Penguin Book), p. 236.
- 7) *Ibid.*, p. 245.
- 8) *Ibid.*, p. 253.

- 9) K. G. W. Cross, *Scott Fitzgerald*, (Oliver and Boyd, Edinburgh and London, 1964), p. 21.
- 10) *This Side of Paradise*, p. 254.
- 11) *Ibid.*, p. 254
- 12) Milton Hindus, *F. Scott Fitzgerald: An Introduction and Interpretation*, p. 23.
- 13) *The Beautiful and Damned*, (A Penguin Book), p. 25.
- 14) Edmund Wilson, "The Literary Spotlight: F. Scott Fitzgerald," *The Bookman*, LV (March, 1922), p. 24.
- 15) *The Beautiful and Damned*, p. 211.
- 16) Robert Sklar, *F. Scott Fitzgerald: The Last Laocoön* (Oxford University Press, 1967), p. 99.
- 17) *The Beautiful and Damned*, p. 364 .

#### REFERENCES

- 1) Arthur Mizener. *The Far Side of Paradise*. Boston: Houghton Mifflin, 1951.
- 2) J. E. Miller. Jr. *Fictional Technique of Scott Fitzgerald*. The Hague Martnus Nijhoff, 1957.
- 3) Alfred Kazin. *F. S. Fitzgerald: The Man and His Works*. The World Publishing Co., 1951.
- 4) Andrew Turnbull. *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. London: Bodley Head, 1964.
- 5) Malcom Cowley. *Fitzgerald and The Jazz Age*. New York: Charles Scribner's Sons, 1966.
- 6) Bryer, Jackson R. *The Critical Reputation of F. Scott Fitzgerald: A Bibliographical Study*. (Hamden, Conn.) Archon Books, 1967.
- 7) Eble, Kenneth. *F. Scott Fitzgerald*. New York: Twayne, 1963.
- 8) Goldhurst, William. *F. Scott Fitzgerald and His Contemporaries*. Cleveland: The World Publishing Co., 1963.
- 9) Lehan, Richard D. *F. Scott Fitzgerald and The Craft of Fiction*. Carbondale, Southern Ill. Univ. Press, 1967.